中学校音楽科鑑賞領域における深い学びを実現する授業づくり
―知識の駆動に着目して―

村山 史帆　教職基盤形成コース　教科授業力高度化プログラム

キーワード：中学校音楽科，鑑賞，深い学び，宣言的知識

１．問題の所在

現行学習指導要領(2018)では，主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を行うことが示されている。この中でも「深い学び」は，各教科の「見方・考え方」を働かせることが鍵となるものであり，各教科等を学ぶ意義の中核をなす重要なポイントである。田村（2018）は，深い学びに注目した学習指導の検討を行っており，「深い学びとは，『知識・技能』が関連づいて構造化されたり身体化されたりして高度化し，駆動する状態に向かうこと」（田村，2018，p.64）と述べている。「知識の駆動」とは，「『知識・技能』が構造化されたり，身体化されたりして高度化し，適正な態度や汎用的な能力となっていつでもどこでも使いこなせるように動いている状態」（田村，2018，p.37）である。

音楽科における先行事例では,「深い学び」に関して知識に焦点を当てた事例が少なく，中学校の鑑賞領域におけるものは限られている。このことから，「知識の駆動」の視点に立ったアプローチを行うことで，中学校音楽科の鑑賞領域における深い学びを実現するための授業づくりの視点の一つが見えてくるのではないかと考えた。

２．研究目的

本研究では，宣言的知識（Declarative Knowledge）を中心とした「知識の駆動」の視点から中学校音楽科の鑑賞領域における深い学びを実現する授業を構想・実践し，その効果について検証することを目的とする。

３．研究方法

本研究では，まず「深い学び」に関する文献調査を行い，音楽科の鑑賞の授業に応用していくための方法を検討した。検討したことをもとに，長野県内のＳ中学校３年Ｄ組(2022 年 11 月，40 名)と２年Ｃ組(2023 年９月～10 月，41 名)において，鑑賞の授業を計６回行った。授業実践の後，ワークシートの生徒の記述を分析し，実践の効果を検証した。

４．実践研究の概要と考察

4.1 中学校音楽科鑑賞領域における「知識の駆動」の仮説の構築

田村(2018)の示す「知識の駆動」のうち，宣言的知識に焦点を当てたものをもとに，中学校音楽科鑑賞領域における知識の駆動についてイメージ図を作成した(図 1)。生徒が鑑賞の授業内で出会う楽曲に関する知識を結び付けながら聴き，授業の外でもこれらの知識を結び付け生かせる状態が中学校音楽科鑑賞領域における知識が駆動している状態であるという仮説を立て，これを目指す授業を構想し，実践を行った。

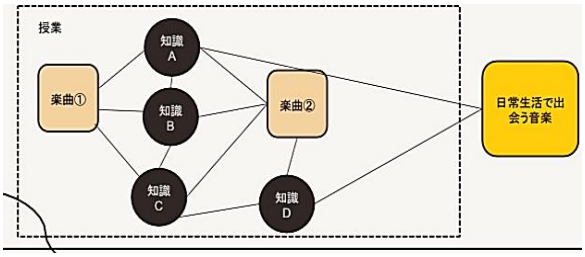

図 1　知識の駆動イメージ図

4.2　B.スメタナ作曲『ブルタバ』を用いた実践(2022 年 11 月)

(1)概要

S 中学校 3 年 D 組を対象に，全 2 時間構成で行った。授業の流れを以下に示す(表 1)。時代背景と楽曲中に何度も現れる旋律の特徴の 2 つの知識の結びつきをねらいとした。

表 1　授業の流れ（2022 年 11 月実践）

第 1 時：作曲者の解説をもとに，楽曲が表す情景をイメージしながら聴く。 第 2 時：宿題として調べてきた時代背景を踏まえ，曲中に何度も現れる「ブルタバを表す旋律」とそのもとになったとされる民謡の比較聴取を行う。

(2)生徒の記述からの分析

個別の知識は理解しているが結びつきが弱かった K 生と，知識を結び付けることで自分の考えを更新し深めることのできた M 生の事例を取り上げる。

K 生は，第 2 時の始めで『ブルタバ』についてチェコに暮らす人々の様子を表していると考えていた。「ブルタバを表す旋律」の比較では終盤で旋律が変化して民謡に似た形に近づくことに気づき，最終的に「どちらかというと終盤の方が多くの人が暮らす街という感じ。チェコ人がチェコの主体だ、みたいな主張」と考察した。授業の中では K 生の「人々の暮らしを表している」という楽曲に対する考えと，ブルタバを表す旋律と民謡の比較聴取から捉えられた音楽の特徴を結び付けて考えを深めるまでには至らなかった。K 生は時代背景，旋律の特徴等の個別の知識は理解できていたため，これらを結びつけて考えやすくするための指導の工夫が必要だったと考えられる。

M 生は，第 2 時の始めで「チェコのよさを伝えるために自然や町の様子を旋律で細かく表したのではないか」と考えていた。「ブルタバを表す旋律」の比較では，終盤の旋律が民謡に近づくことに気づいた上で，強弱や音の高さに着目して旋律を比較し，最終的に「ブルタバの流れが最初は細い源流からだんだん流れが激しく大きくなっていく。だから，ハンガリー・オーストリア帝国の支配に抗い、自分たちの自由（チェコの民謡）を手に入れるみたいな様子が表されているのかなと思った」と考察した。M 生は時代背景だけでなく，第 1 時に着目した情景やイメージと，第 2 時の学習でとらえた「ブルタバを表す旋律」の特徴を結び付けながら自分の考えを更新していた。このことから，第 2 時での M 生の学びは知識が駆動している状態といえるのではないかと筆者は捉えた。

(3) 考察

主に第 2 時で作曲当時の時代背景を踏まえて楽曲と関連付けて聴いたことで，楽曲に関心を持ち始めた生徒の姿が見られたが，M 生のように学んだことを関連付けながら考察することのできた生徒は少数で，K 生のように時代背景や旋律の特徴を個別の知識として習得するにとどまった生徒が多かった。授業の中で，筆者が音楽の聴き方を時代背景と曲中の旋律の特徴を結び付けるという 1 つの道筋に限定してしまったこと，生徒が得た知識を整理し，活用する場面を設定できなかったことが要因ではないかと考察した。この反省を踏まえ，2023 年度の実践では生徒の音楽の聴き方を限定しないよう多くの視点を取り上げること，知識を整理し活用する場面を設定することを意識した授業を構想・実践した。

4.3　J.S.バッハ作曲『フーガ　ト短調』, L.V.ベートーヴェン作曲『交響曲第 5 番　ハ短調』を用いた実践(2023 年 9 月～10 月)

(1) 概要

S 中学校 2 年 C 組を対象に，全 4 時間構成で実施した。授業の流れを以下に示す(表 2)。

表 2　授業の流れ（2023 年 9 月～10 月実践）

J.S.バッハ作曲『フーガト短調』 第 1 時：既習事項であるカノンとの比較から，主題の現れ方を捉える。 第 2 時：形式と転調に着目し，楽曲全体の構造を捉える。 L.V.ベートーヴェン作曲『交響曲第 5 番　ハ短調』 第 1 時：動機の現れ方に着目して提示部の第 1 主題と第 2 主題の違いを捉える。 第 2 時：ソナタ形式について学習し，楽曲全体の構造を捉えて聴く。

2022 年度の実践の反省から，楽曲を聴く際の視点として『フーガト短調』では主題の現れ方，カノンとの違い，転調，形式の 4 つを，『交響曲第 5 番　ハ短調』では動機の現れ方，音色，強弱，調，形式の 5 つを取り上げ，生徒が多くの視点から楽曲を捉えていけるように提示した。また，習得した知識を整理し活用できる場面として，学習のまとめに紹介文を書く活動を設定した。

(2) 生徒の記述からの分析

多くの視点を取り上げたことで知識を結び付けて駆動させた K 生，紹介文が有効に働いた O 生の 2 名の事例を取り上げる。

K 生は，『交響曲第 5 番　ハ短調』のよさや魅力を図にして記述した(図 2)。

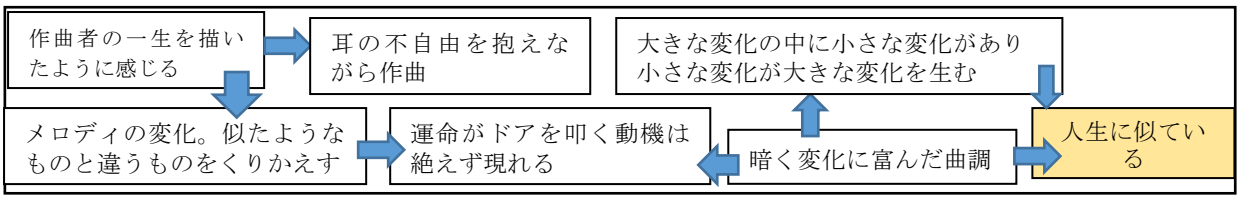

図 2　K 生の記述（筆者清書）

様々な視点から自分が捉えた特徴と作曲者の背景を結び付け，「人生に似ている」という自分の捉えの根拠とした K 生の学びは，授業で得た知識が結びつき駆動している状態と言えるのではないかと筆者は捉えた。楽曲を聴く視点を多く取り上げ，それに沿って聴ける

ようにしたことで，K 生のこのような姿に結びついたと考えられる。

0 生は，自分の伝えたい楽曲の魅力に即した知識を選択し，紹介文を記述した(表 3)。

表 3　0 生が記述した紹介文

J.S.バッハ作曲『フーガト短調』のよさや魅力について 「転調によって曲の雰囲気が変わるところ。嬉遊部で明るさが増すこと。」 L.V.ベートーヴェン作曲『交響曲第 5 番 ハ短調』の紹介文 「長いコーダに K さんが言っていたような物語性を感じた。動機を一番最後に持ってきているところにベートーヴェンのセンスを感じた。」

0 生は『フーガ ト短調』では転調,『交響曲第 5 番 ハ短調』では長いコーダという一つに絞った視点から紹介文を記述したが，楽曲の他の特徴に気づいていないわけではなく，ワークシートには複数の視点から気づいたことをまとめていた。紹介文を書く際に必要な知識を思い出し，選択して使うことができている点から，0 生は知識を自由自在に使えている状態であり、知識が駆動していると筆者は捉えた。生徒が知識を整理し，活用する場面の設定により，深い学びへとつながっていくのではないかという示唆が得られた。

(3)考察

K 生や 0 生の学びの姿から，多くの視点を取り上げること，生徒が知識を整理し活用できる場面を設定することは，知識を駆動させ深い学びへつなげるために有効に働く手立てであったといえる。二つの楽曲を扱ったが，今回の実践における手立てでは同じ楽曲を扱う授業の中だけで知識のつながりが完結してしまい，すでに習得しているはずの知識を生かし，活用できる状態までは至らなかった。指導の工夫として，生徒がすでに習得している知識を想起する活動を意図的に仕組む必要があったと考えられる。

５．成果と課題

本研究では，楽曲を聴く際に多くの視点を取り上げること，生徒が知識を整理し，活用できる場面を設定することを意識し授業づくりを行った。これらはいずれも生徒が知識を駆動させるために有効に働き，中学校音楽科鑑賞領域における深い学びにつながるものといえる。しかし，本研究における実践では，同一楽曲を扱う授業の中でのみ知識をつなげ駆動させている状態にとどまり，異なる楽曲を聴いたときや日常生活で音楽に触れる際にも知識をつなげられる状態までは至らなかった。授業の中ですでに習得している知識を想起する活動を意図的に仕組む等の指導の工夫が必要であり，知識の駆動をねらった授業を単発で行うのではなく継続的に行い，その効果を検証していく必要があると考えられる。これらについては，今後の課題としたい。

主要参考文献

田村学(2018)『深い学び』東洋館出版社.
文部科学省(2018)『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』教育芸術社.
Ludwig Wittgenstein，黒田亘(訳)(1975)「確実性の問題」『ヴィトゲンシュタイン全集』，大修館書店，第 9 巻，pp. 7-169.